

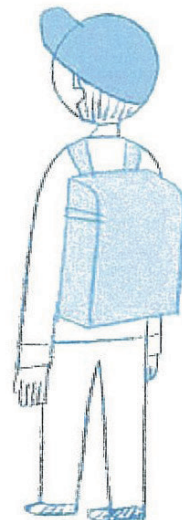
①

現在の教育の土台になっているのは、  
明治5年から始まった学制。  
戦後、学制改革が行われたが、  
そのコンセプトは同じ。  
近代工業国家をつくるために、  
知識と技術を画一的に  
詰め込む教育だった。

でもこれはひじょうにいびつな教育。  
顔かたちが一人ひとり違うように、  
人間はその中身もみんな違う。  
さまざまな個性、天分を持つ人を  
画一的に教育するのは間違っている。

自然界に無駄なものは一切ない。  
すべての人に持って生まれた天分がある。

障害があってもなくても、  
全員に意味があり、必要だから生まれている。  
それを見出し、育み、活かすように導くのが  
教育の使命。  
その視点に立ち、教育を根底から見直そう。



②

## まず子供に教えるべき 大切な基礎は3つある。

### 1 つ目は「宗教心」。

特定の宗教を教育するという意味ではない。  
「お天道様が見ている」という表現が昔はあったけれど、  
神様ならどう考えるだろう、  
天から見たらどう見えるのだろうと、  
自らの言動を高い視点から客観的に見る力を養うのだ。

### 2 つ目は「道徳」。

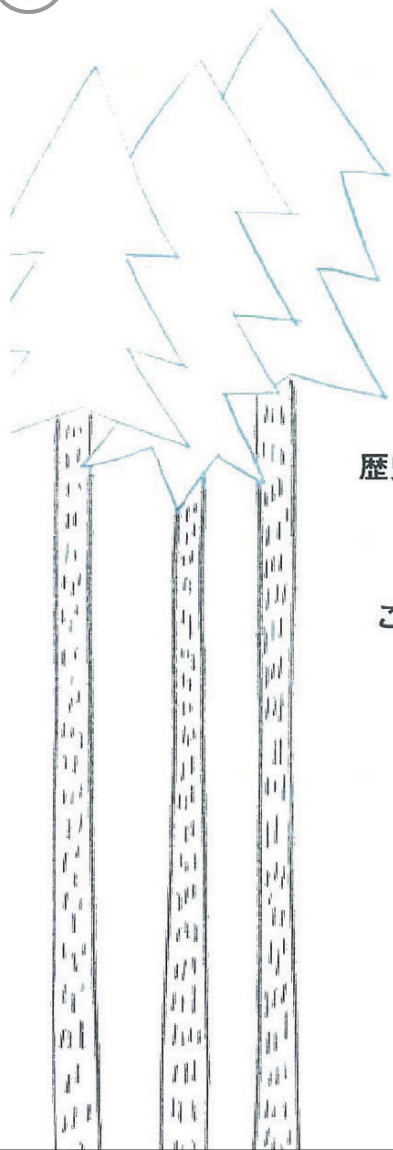
道徳とは、生き方として何が正しく、  
何が間違っているかを、経験則に基づいて示した規範。  
学校ができる前から、日本には優れた道徳教育があった。

### 3 つ目は「歴史」。

人は生まれた土地の文化や風土を含む  
歴史を背負って育つ。  
国の歴史、先人の行いを肯定的に評価しない限り、  
子供はまっすぐ育たない。  
異常に自虐的な歴史観を教えたら、子供は曲がるばかり。

たとえば、お金の使い方に細かかった  
ひいじいさんがいたとする。  
そのひいじいさんのことを  
「うちのひいじいさんはケチだった」  
そう子供にずっと言い聞かせたら、  
「どうせ俺もそんな人間だから」とその性根は歪んでしまう。  
けれど「ひいじいさんは儉約家だった」と教えたら、  
「自分も恥ずかしくない生き方をしよう」と思うはずだ。

③



自分たちの国が  
いかに素晴らしいかを、  
歴史を通じて教えることで、  
子供はまっすぐに育つ。  
これは世界中どこの国でも  
普通に行っていること。  
だが日本だけは、  
悪い国だと  
言わんばかりの調子で  
教育をしている。

宗教心、道徳、歴史を  
国民共有の得難い財産と思い、  
子供に伝える気持ちがなければ、  
どんな仕組みをつくっても  
子供は正しく育たない。

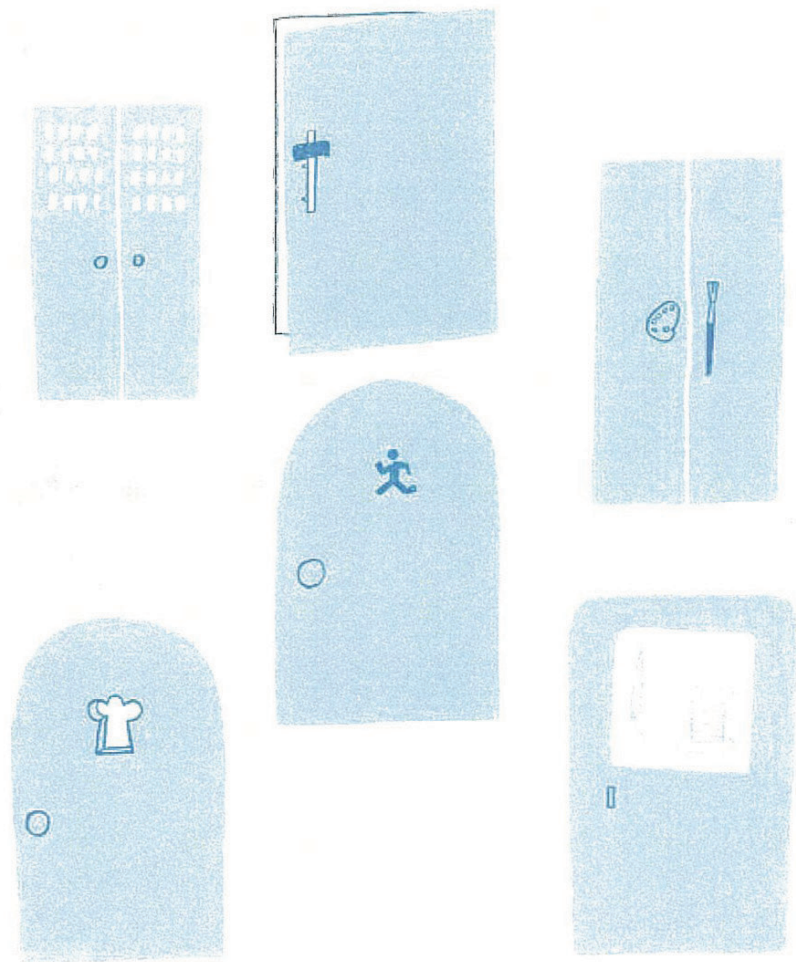
**次の段階で必要なのは、  
教育の自由化だ。**



## ④

江戸期にはさまざまな教育機関があり、  
町人も武士も通っていた。  
教育機関は自由に設立できて、  
人々はそこから自分に合ったところを  
選んで通っていた。  
しかし明治以降は、  
国がつくった学校しか認められなくなった。  
そこで行われるのは  
軍人をつくるような画一的な教育。  
これからは江戸期のように  
学校の設立を自由化すべきだ。

誰でも志を持ち、一定の基準を満たせば、  
学校も塾も自由につくれるようにしよう。  
そのカリキュラムを国が認める仕組みをつくれれば、  
百花繚乱の教育機関ができる。  
そこから親と子供たちが自由に選べばいい。



5

運動会の徒競走で順位に差がつかないように、  
 手をつないでみんなでゴールする学校の話、  
 聞いたことがあるはずだ。  
 それこそ戦後の画一教育、悪しき平等主義の典型。  
 人間の天分は多様。算数や国語は苦手だが、  
 かけっこだけは速いという子供もいる。  
 彼らがいちばん胸を張りたい  
 徒競走を全員一等賞にしたら、  
 彼らの居場所がなくなる。  
 教育で大切なのは、  
 自分が試せる場所をたくさんつくること。  
 画一教育は人間性の本質から外れている。

運動選手の学校があってもいい。  
 大工さんの学校があってもいい。  
 経営者を育てる学校があってもいい。  
 午前中は大工の学校に行って、  
 午後からは経営者の学校に行ってもいい。  
 その人の天分が最大限に活かせる社会をつくるのが  
 明日の日本を動かす活力になる。

